

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT25182

段先生の国際協力講座―開発途上国の抱える問題について考えよう―



開催日：平成25年8月8日(木)
実施機関：阪南大学(本キャンパス441教室)
(実施場所) 室)
実施代表者：
(所属・職名) 段 家誠(国際観光学部・教授)
受講生：中学生3名
高校生26名
関連URL：<http://www.hannan-u.ac.jp/lifelong/mrrf4300000twwi.html>

【実施内容】

◆本プログラムのねらいと工夫

本プログラムは、開発途上国と先進国における政治・経済・環境・社会等の様々な問題を「開発と環境」「参加型学習」をキーワードにして、参加者の考える力、問題対処能力を育成することを大きなコンセプトとしている。現在、日本を始め多くの国々と国連、その関連機関、世界銀行等が国際援助を行っている。開発途上国で行われている巨大開発プロジェクトがその国の人たちにとって、どのような影響を及ぼすのか、疑似体験してもらうのが目標である。プログラム上工夫した点についてであるが、【実習①】受講生自身に自分の世界観を気づかせるために世界地図を描かせた。受講生が描く世界地図は多くが単調な図形だったり、いびつなものであったり、日本国土の把握もままならないものが散見された。【ミニ講義】国際協力について理解を助けるために、ブレトンウッズ体制を構成する世界銀行、国際通貨基金(IMF)、世界貿易機関(WTO)と国連、アメリカ合衆国、グローバル化、非政府組織(NGO)について、多数のスライドを使ってわかりやすく概説した。【実習②】先進工業国と開発途上国・後開発途上国の国数・総人口・一人あたりGNI、出生時平均余命、5歳未満児死亡率、成人層識字率などのデータから南北格差を読み取らせた。その後、実施代表者が過去20年間に開発途上国の現地で撮影した膨大な写真データから選んだ約130枚の写真を使い、受講生にそこから何が読み取れるか、その背後に何があるかを考えさせた。受講生は初めてみる開発途上国の写真を、真剣なまなざしで考察していた。【実習③】いくつかの存在する世界銀行の開発プロジェクトをモデルに、それらをプロジェクト・サイクルに沿って、開発計画の立案・実施を体験できるようなロールプレイングをおこなった。具体的には、参加者を先進国、国際機関、開発途上国首都、開発途上国プロジェクト・サイトの4つのグループに分けて、そこで国債、銀行債、借款、疑似通貨やモノを流通させて、国際貿易や国際援助の仕組みを理解させつつ、世界銀行のプロジェクト・サイクルを参考に、実際のダム・プロジェクトを疑似体験させた。さらに、現地プロジェクト・サイトを、A3大のジオラマを制作して、そこで暮らす人々の生活を、植林やその伐採、住宅の建設、フェアトレードなどを通じて体験させた。またレア・メタルの採掘やダム建設と貯水の進行などによって、環境破壊が行われることや、開発者とその影響を受ける人々の対立や葛藤を、疑似体験できるようにした。このロールプレイングでは、実施代表者と参加者の対話を通じて、双方向ワークショップを行うよう努めた。また、各グループ間で自然と議論や意見交換ができるように、シナリオを工夫して相互の交流を促した。実際に、各グループ間においてダムの利便性と問題について、具体的なやりとりが自然と発生していた。ワークショップでは、適宜、実施代表者が科研費調査で撮影した画像やその過程で入手した貴重な映像データを用いて、現地で生じる移住問題などの開発問題をわかりやすく理解できるようにした。ロールプレイングの最後、ジオラマ模型のダムが設置されたのち注水された。終了後、実施代表者は、実際のダム・プロジェクトの便益や問題点、国際援助の抱えるメリットやデメリット、問題等について説明した後、ダム水没地域で抵抗するインドの人々のニュース映像や海外でダムが解体撤去される映像等を紹介した。なお、当日は日本学術振興会から研究成果の社会還元・普及事業推進委員会委員が出席された。



実習①の様子



ミニ講義の様子



実習②の様子1



実習②の様子2



実習③の様子1



実習③の様子2



実習④の様子1



実習で使用したジオラマ

◆当日のスケジュール◆

- 10:00 受付
- 10:20-10:40 開講式・プログラム全体の趣旨説明、科研費の説明・諸注意
- 10:40-11:00 【実習①】世界地図を描いてみよう。いろいろな世界地図
- 11:00-11:20 【ミニ講義】「国際開発援助とは何か？」
- 11:20-11:30 休憩
- 11:30-12:30 【実習②】「写真・データから開発と環境問題を読み解く」
- 12:30-13:30 昼食・休憩
- 13:30-15:00 【実習③】「国際援助を疑似体験する」(前半)
- 15:00-15:10 休憩
- 15:10-16:30 【実習④】「国際援助を疑似体験する」(後半)、解説とまとめ
- 16:30-17:00 アンケート実施、修了式「国際協力講座受講証明書」授与
- 17:00 終了・解散



発表と講評

◆事務局との協力体制

実施代表者は実施10ヶ月前から事務局担当者と連絡を密にして、基本プログラムの設定と参加者の理解を深めるためにはどのようなことに留意し、どのような工夫が必要か議論しながら相互理解と信頼関係を構築していった。とくにプロジェクト・サイトを表現するための地形模型について、その制作方法や制作時間、運用方法などについて細かく調査して、資料と材料の収集にあたった。本プログラム実施においては、事務局は、事前に仮想通貨などの小道具等を準備した。また当日は、受講生のフォローを適宜行い、講座運営の補助を行った。委託費の管理については、実施担当部局である研究助成課が専用の帳簿を備えて適切に管理して執行した。

◆広報活動

実施担当者と実施担当部局(研究助成課)が広報担当部局と協力して、大学の広報誌、ホームページに募集案内を掲載した。また、近隣の中学校・高等学校を訪問した他、それ以外の学校に対してもポスター及びリーフレットを配付するなど積極的な広報活動を実施した。また、タウン誌や市役所の広報誌、駅貼りポスター広告で対象者(中高生)に限らず広く一般に科研費の研究成果がいかに本プログラムに活かされているかを周知させた。

◆安全配慮

本年は、猛暑日が続いていることから特に熱中症による体調不良に十分配慮し、休憩時間を適宜とり、水分補給をできるようにした。また、ノロウイルス等食中毒等の防止のためアルコール消毒薬やウェット・ティッシュなどを用意した。プログラムではすべての行動について教職員やアシスタント学生が常に付き添い、プログラム時間内(開始から解散まで)には傷害保険に加入することで、十分な安全体制を確立した。

◆今後の発展性、課題

今回の講座は、前々回の講座(H21採択事業 HT21154)および前回の講座(H23採択事業 HT23157)での経験や成果・課題を踏まえ、目標と内容、スケジュールの見直し、教材の改良に加えて、新たなプログラムと教材開発を行った。具体的には、実施代表者が科研費で調査した実在する開発途上国のダム・サイトを、衛星写真や現場で撮影した写真等を参考にしてジオラマ模型を作成した。制作には準備期間を含めて約2ヵ月かかった。諸外国を含めて、国際開発援助の問題について実際にジオラマを使って、ワークショップ形式で学習する機会を設けたのは、この講座がおそらく世界最初であろう。今後、この取り組みをさらに改良して、教育教材として普及できるようにしたい。

【実施協力者】 2名

【事務担当者】
戀川照義 研究助成課・係長